障害学を補助線にしてみる

補助線にしてみることにします。その理由は、この「楽しい音楽」はわれわれの社会のマジョリティの感性ととても関係があると思うからです。そこでその反対にある、社会のマイノリティ側の視点をもちこむことによって、なにかが見えてくるかもしれないというわけです。

障害学というのは、文字どおり「障害とはなにか？」を考える学問です。自閉症の権利運動などとも関係しながら、二〇〇〇年ごろから発展してきました。これはいままでの障害者をめぐる考え方とはちがい、障害者の視点から障害というものをとらえなおそうとするものです。

障害は本人にとってはもともとあるもの

たとえば先天的な視覚障害者の場合、自分が視覚障害と呼ばれること自体、まず理解できません。なぜならば、当事者にとっては最初から視覚という概念がないわけですから、そう呼ばれてもなんのことなのかわからないわけです。そういうことをくり返しくり返しいわれることによって、ほかのひとたちは視覚という感覚をもっているらしいと、だんだんと理解していくしかな

いのです。だから、自分たちのことを一方的に障害者と呼ばれても戸惑うばかりです。

同様に自閉症者も、障害者と呼ばれても実はなんのことだかよくわかりません。なぜならば、彼らにとってはそれがふつうの生き方だからです。ですので、自閉症というのは障害ではなくひとつの生き方として認めるべきである、という主張も登場してきます。このような意味で障害というものをひとつの文化としてとらえるならば、一九五〇～六〇年代の文化人類学の隆盛とともにあらゆる分野で文化の相対化が盛んになったことと比べると、こういった障害にたいする考え方の登場というのは、ずいぶん遅れをとったようにも見えます。

社会のインフラはふつうのひとを対象にしたもの

たとえば、自閉症者などの障害者の側からいまの社会のインフラというものを見た場合、それは、いわゆるふつうのひとたちの考え方によって設計されてきたものでしかありません。現代社会のさまざまな設計は、ある種の傾向があるひとたちのことを自閉、すなわち自ら閉じこもったひとたちと呼び、

そして囲ってしまい、それを特殊な例として切り捨てたうえで、それ以外のひとたちを対象にしてつくってきたものです。それは自閉症のみならず、視覚障害者をはじめ、あらゆるマイノリティにとっても同じことでしょう。道路や駅などの具体的なインフラから、医療や税などの社会システムにいたるまで、世の中は自分たちのことを勘定してつくられてはいないのだなと感じるひとは想像以上に多いはずです。こういったことの積み重ねが、いわゆるふつうのひとびとの、マイノリティへの視点を劣化させていることにつながっているのではないでしょうか。

ふつうのひとの言動は不思議なもの

群れたがる、あいさつや贈り物を気にする、不思議なひとたち

ところがこのマジョリティとされるふつうのひとたちの言動というのは、自閉症側から見ると、かなり不思議なものなのです。

アメリカ精神医学会が発行している『精神疾患の診断・統計マニュアル』

というものがあります。ディアグノスティック・アンド・スタティスティカル・マニュアル・オブ・メンタル・ディスオーダーズの訳で、略してＤＳＭと呼ばれています。これは「自閉症の行動の特性は次のようなものである」といったふうに、一般的な診断のための基準のマニュアルでして、医学的にはよく使われているものです。

これの最初の単語のディアグノスティックをディアボリスティック、つまり「悪魔的」に変えたジョーク版のＤＳＭがあります。そしてそのなかに「ニューロティピカル」という症候群の定義があります。その項目がもつ意味について説明をしたいのですが、その前にまず、この「ニューロティピカル」ということばについて説明します。

まず「オーティスティック［autistic］」ということばがありまして、これは「自閉的な」、あるいは「自閉症の」という意味です。そしてそれの対極にあるものとして、「ノーマル」や「健常」ということばが使われる時代がありました。「健常者」ということばはいまでも使われていて、「障害者」に

「発達論的に定型」から
「神経学的に定型」へ

対置されています。

ですが、時代を経るにつれて、こういったノーマルということばはだんだんと使われなくなってきました。それは、いまやなにが健常でノーマルなのかわからなくなってきたからにほかなりません。そこでそれに代わって「定型発達」という言い方が使われるようになりました。「発達論的に定型的」というニュアンスです。要するに「健康かどうか」という良い悪いの判断ではなくて、「標準的に発達したかどうか」で見る、ということです。

そのいっぽうで、自閉症側からの動きとして、「オーティスティック（自閉）」の対極に位置するものとして、「ニューロロジカリー・ティピカル」という言い方が使われるようになります。「神経学的に定型的」という意味です。健常者側からのことばである「発達論的に定型的」ではなく、あなた方は「神経学的に定型的」な人間だ、というわけです。つまり「（わたしとあなたの違いは）神経学的な差異にすぎない」ということです。そしてそれが縮まって、最近ではいわゆる定型発達者のことを「ニューロティピカル」と呼ぶように

なりました。

こうやって自閉症に対置するひとびと、つまり大多数のわれわれを指すことばとして、ニューロティピカルということばが誕生しました。

では、この『ディアボリスティック・アンド・スタティスティカル・マニュアル・オブ・メンタル・ディスオーダーズ』のなかの「ニューロティピカル症候群」の項目の一部を以下にご紹介します。くり返しますが、これはDSMのパロディとして、大多数のわたしたちが陥っているであろう病気、つまり、「ニューロティピカル症候群」にかかっているかどうかを判断する診断基準が書いてあるわけです。

1. 社会的関係における質的欠陥に関して：次のうち少なくともふたつに該当する場合

a. 正確な言語や社会的相互関係を制御する正直さなど、言語行動におけるそれらのきわだった欠損

b. 非ニューロティピカル者との仲間関係への発展の欠損、非ニューロティピカル者を虐待する必要性及びしばしば見られる他者を操作する不適切な試み

c. 自身の関心を他者とわかり合う自発的な欲求の欠如（たとえば他者の関心すべてに対する表現の欠如をともなう雑談の常態的使用）

d. 社会的情動的相互関係の欠如、他のすべてのものがニューロティピカルの考え方に従わなければならないという信念

2. 限定的で反復的ステレオタイプ化された行動、活動パターンについて：次のうち少なくともひとつに該当する場合

a. 強度あるいは焦点において異常である、こども／ゴシップ／リアリティ番組などステレオタイプで限定的なパターンへの排他的没頭

b. 特定的で非機能的な手順や儀式への明瞭に杓子定規な固着、たとえばネクタイ、ハイヒールあるいはその他非快適的な服装の着用（ソッ

クスとサンダルの着用よりも水ぶくれや水虫の苦痛を選ぶ）

c. ステレオタイプ化された反復的風習（たとえば意味のないおせっかいによる欲しくもない贈り物）

d. ある製品のブランドを示すタグのような物体の一部への頑迷な固着

まだもう少し続くのですが、こんなところでいいでしょう。要するに、いわゆる健常者、定型発達をしたとされるひとたちは、「うそをつく」、「群れたがる」、「きゅうくつな服を着たがる」、「階層を重んじる」、「あいさつや贈り物を気にする」などの不可解な行動をする不思議なひとたち、ということです。

群れたがり
あいさつや贈り物
を気にする
「群れたがり症候群」

もちろんそれはわたしたちが日常的にやっていることなのですが、自閉のひとから見たら「そちらのほうがどう見ても病気でしょう」というわけです。象徴的な言い方をすれば、「群れたがり症候群」とでも呼べるでしょうか。

そして、これはけっしてジョークとして読み飛ばされる類いのものではな

く、これによってわたしたちはあらためて自分たちの行動の一種の特異性に向き合わざるをえなくなります。

というのは、これを読んだほとんどのひとが、ふだん自分たちが無意識にとっている言動について、「ああ、そういえば当たってるな」、「いわれてみると、おかしなことだよな」と思うのではないでしょうか。または、自分には非ニューロティピカル、つまり自閉症的な面もあるんだなと思うひとも多いことでしょう。つまり、ニューロティピカルと非ニューロティピカルというのは、「あなたはこっちであなたはあっち」みたいに人間ごとにグループ分けできるものではなく、ひとりの人間のなかにも両方がまざりあった状態で存在する、度合いの問題でもあるのです。

非ニューロティピカルな音楽をさがして

ここまで、わたしたちの多くは自閉症に対置されるものとして「群れたが

り症候群」とでもいうべき存在だということを見てきました。本書のテーマである音楽に話をもどしますと、音楽を意味的に構成するいくつかの要素を見てみますと、この「群れたがり特性」とでもいうべきものがその多くを占めていることがわかります。いっしょに歌を歌ったり、コンサートに集まったりすることはニューロティピカルな音楽特性です。だいたいの音楽はそのような目的のためにできているといっても言いすぎではないでしょう。やはりみんなで集まって喜びたいのです。だから序章でとりあげたような「楽しい音楽」という発想が生まれるわけです。しかし、そうではない音楽、つまり非ニューロティピカルな音楽はないだろうか、と考えてみることが、本章の本旨でした。

音楽療法の現場にいますと、自閉症のひとがひたすら同じ音型を反復することに出会うことがよくあります。それからほとんど空白のような、ぽつりぽつりとしか音のない音楽を奏でるひともいます。また彼らの多くは、あまりひとと合わせようともしません。つまり、あまり他者と群れたがらない音

楽といえる性質をもっているようです。でも、彼らの多くは音楽が好きです。そういったものを聞いていると、問題の「楽しい音楽」とはまったく対極に位置する音楽が存在することが予感されます。

こういった音楽は、現代音楽というフィールドにおいて少なからず見受けられます。たとえばヴェーベルン〔作曲家。一八八三〜一九四五〕というオーストリアの作曲家がいます。彼はとても寡作のひとでして、全部の作品を合わせても三時間ぐらいしかありません。このひとの作品はとても寡黙で、空白のなかに音がぽつりぽつりとあるような音楽です。それから同じフレーズを飽きることなく反復する音楽はスティーヴ・ライヒ〔アメリカの作曲家 一九三六〜〕やリゲティ〔ハンガリーの作曲家 一九二三〜二〇〇六〕の作品に見られます。これらの音楽を指して、先ほどの自閉的な音楽特性に似ているとする指摘はいくつかあります。

音楽が感情をにないはじめたのはほんの最近のこと

ここでわたしがいいたいのは、音楽を一定のフォーマットではなく、もっと大きな視点で眺めてみる必要がある、ということです。割り切った言い方になりますが、楽しいとか悲しいとかの感情を音楽に託すという思想がはな

っからない音楽も、この世の中には数多く存在しているということです。

音楽を感情の発現として扱ったり、ある音楽からなにか共通した気分をみなと共有した気になるのは音楽の一般的特性といえますが、喜怒哀楽の感情にこれほど特化した音楽は、さほど古くない欧米に出現した特徴的な考え方のひとつです。つまり、ほんの二百年ほどの流行にすぎない、ということです。このように非ニューロティピカルな音楽を考えてみることは、そういった西洋近代的な価値観から離れて音楽を考えてみることにつながるのではないでしょうか。

〝片方がもう片方を教える〟ではない関係

このことは、最近になって音楽療法の世界に登場したコミュニティ音楽療法という考え方を見るとよくわかります。かつて音楽療法というものは、自閉症のこどもや精神疾患のひとたちなど、つまり問題をもった対象者にたい